

日向夏みかんの冬季落果防止並びに結実促進に関する研究

岸本 勇元・松野 弘・藤崎 満

(宮崎県農業試験場)

KISHIMOTO, Y., MASTSUNO, H. and FUJISAKI, M.
Studies on the Prevention of Winter Drops and the Artificial
Promotion of Fruitfulness on Citrus Tamurana

緒 言

日向夏みかんは宮崎県原産である。元來樹勢強健で耐病性強く栽培も容易であるが、冬季落果が著しく多いこと、及び樹が古くなるにつれて結実が悪くなるのが栽培上大きな欠点である。三輪氏、岩崎氏等により冬季落果防止、及び結実の促進について実験が行なわれて落果防止、結実促進の方法究明が行なわれているが、筆者等は更にこの問題について実験と実態調査を行ない、実用的防止及び促進の手段を明らかにするよう努め、1959年以來4カ年間に亘つて行なつた実験調査の結果を報告する。なお本報告は宮崎県農業試験場研究報告第2号に記載したのでここでは概略を述べる。

1. 調査及び試験方法の概要

(1) 冬季落果の防止については、落果の実態調査、及び落果を起す環境調査(日照、遮光)と果実の品質変化を調査した。落果防止対策としては2.4-Dの散布による落果防止、早期採収(冬季落果回避)試験を行なつた。

2.4-D散布による落果防止試験方法は供試樹は30年生(積穀台)4本、供試濃度は1万倍区は4区とし11月21日、12月20日、1月20日各散布区および無処理区とした。

早期採収試験方法は供試樹24年生(積穀台)4本を使い試験区は2区とし貯蔵区、樹上区とした。貯蔵は3

月15日採収貯蔵し、樹上区は5月23日迄結実をさせた。

(2) 結実促進については不結実の原因調査として37年生(積穀台)5本、幼木7年生(積穀台)5本を使い頂花型、房状花型、直花型に分けて調査した。結実促進に対するホルモン剤による試験は38年生(積穀台)5本を使い試験区は無処理区(授粉のみ行う)、24-D区(20ppm)、ナフタレン醋酸ソーダ区(20ppm)ジベレリン区(500ppm)にした。

3 試験結果の概要

1. 日向夏みかんの冬季落果防止法並びに結実促進に対する1957~62年の4年間に亘り実験した。

2. 日向夏みかんの冬季落果の波相は3回あるが、第1回及び第2回の落果(1月、2月)は厳寒期の低温がその原因であるが、第3回(3月)のそれは低温の外に果実の成熟並びに新梢の伸長に伴なう生理代謝と深い関係があり、落果量は3期の中で最も多い。

3. 日向夏みかんの不結実性は自家不和合にもよるが花器の不完全が更に大きな原因になつている。したがつて、施肥、整枝剪定技術の確立及び適地選定、砧木等の研究が必要である。

4. 日向夏みかんの結実促進(早期落果、花防止)に対するジベレリン500ppm、及びナフタレン醋酸ソーダ20ppmの処理は有効である。